
ラズベリー

おまみ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ラズベリー

【Nコード】

N2382C

【作者名】

おまみ

【あらすじ】

これは、ある歌をモチーフにして作りました。まあ、、、なんて言うか恋愛ですね（笑）あるサイト様に投稿もしてたりします^^でも、暇つぶしに読んでくれたらうれしいです。でも、だいぶ長いなあ（笑）

第一話

汗まみれで泥まみれになってる君の汚いスカートをみると、ワクワクする。

君のスカートはピンク色で、ひとつハートマークのアップリケがついてる。

好きだな。ふと、思った。

これが恋に落ちるっていうのかな？

そう思ったのは小5。

そのころ、僕は告白するとか、そうゆうのはもっと大人からだと思ってた。

付き合うとかも、最近知った。

でも、つい言ってしまった。

「好きです。付き合ってください。」

いいたくて仕方が無かった。愛しかった。

君に触れたかった。それは変な意味じゃなく。

「ごめんなさい」

あっさり断られた。それは、小5。

いつの日にか忘れるだろうと思ってても、忘れられない、深い傷。

そして、僕は今中2になった。

いろんな事も知ってる。大体大人。でも、中身は子供。

ビミョーな年頃。

明日からも同じ日が始まる。

なんとなくガンバロかな・・・

第二話

今日は晴れ。とてもきれいな空。

明日も晴れるといいな。今日は始まったばかりなのに明日のことを言ってる。

学校でもいこうかな？

「ヒロシ、おはよう、」「おはよ

“挨拶はしっかりと” だれが決めたんだろ？

「あ、おはよう。ちよつと来てほしいの。」

誰だよ。めんどくさいな。話すんじゃねえよ。顔を上げた、「え？」思わず声を出していた。マンガみたいな話だけど、あいこがいた。

あきらめてた恋の花がまた咲き出して、僕の心を締め付ける。

「あのさ、ヒロシちよつと来て」

走り出した。しかも、ピンクのスカート。。。魔法にかかった。

そして、僕は追いかける、君を手に入れたい。

いろんな人にけなされようと、君を守って傷ついてもいいんだ。

「ちよ、ちよつと待って」

僕は、呼んだ。「ん？」と息を切らしながら、あいこは笑顔で見つめてくる。

「もうちょっとだから、がんばれ。」

「え、あ、うん」

僕は一生懸命走る。あの娘も走る。

どこへ行くんだ？

あ、あそこは、昔、僕が告白したところ・・・
なんでだろ・・・

「ここ、覚えてる？」

「うん、覚えてるよ」

波の音が聞こえる。

「あのさ、この場で言うのもなんだけどさ、」

「・・・」

「あたしと付き合ってくれないかな？」

「へ？」

思ってもいなかった事に変な声を出していた。

「やっぱりいやだよな・・・」

「いやいやいや、び、びっくりしただけなんだ。」

僕からも言うけど、付き合ってもらえませんか？」

「もちろん、ありがとう」

顔中いっぱい笑顔で言われた。

やっぱりかわいいな。顔がにやけてしまう。

これから、楽しい事が待ってるだろうなー

「そうだ、明日休みだし、一緒にどっか行かない？」

「え？いいの？」

「んじゃ、公園で10時に、待ってるね。あ、信号の近くで待ってるから」

「うん、分かった」

こうして、僕たちは付き合っ事になった。

第三話

今日も晴れ。人生初めてのデート。楽しみだな。9時50分であるか。

「あ！早く早く！！」

あいこはいた。やっぱり早いな

「ちょっと待っててー」

走り出した。信号確認。よし、青だ。
走り出した。途中で誰かが

「あぶない！」

「へ？」

後ろを振り向くと、トラックが目の前だった。

トラックに僕はあたった。宙に僕は舞う。
体の節節が痛い。

「ヒロシー！！」

あいこが叫んでる。

「あいこ。。。」

小さくても、叫んでみる。

この声は届くかな？

あいにありがとうございますをいわなきゃ。

い、わない、と、、、

そう思っても僕は眠りの国へ連れて行かれる。
あいがとなりで叫んでる。

「ヒロシ！いやヒロシ！行かないで！」
最後にの力で

「あいこ、ありがとう」

あいこは泣いていた。

それが、僕が最後に見た光景だった・・・
ありがとう、あいこ。

なんとなく目がさめた。

ここは、どこだろう・・・
頭がぼんやりする。。。

声が聞こえる。

「ヒロシ・・・ ヒロシ・・・ ヒロシ・・・」

僕を呼んでるの？泣いてるの？なんで？

この子だれ？

目をつぶってみる。何も変わらない。

どうしよう・・・何をすればいいんだろう。

わからない。

今は、これしか考えられない。

どうすれば、いいんだろう。

起き上がって見た、そこにいた子が急に笑った。

僕は、ぼーっと見る。女の子は顔をしかめて、泣いた。

第四話

- 1 -

なぜか急に頭が痛くなったりする。けれど、すぐ終わる。

医者に呼ばれた、僕は「一過性の記憶喪失」と、言う病氣らしい。

一過性の記憶喪失とは、一時的に記憶が途切れるという事。睡眠をすれば治るらしい。原因はわかってないそうだ。

しかし、僕はさっき寝てたはずだ。それなのに、記憶は戻ってない。

どうゆうことだ・・・？

昔の事を思い出してみる。

僕は中学校に入って、えーと・・・
ここから先は霧があるように、全然わからない。

・・・今何歳なんだ？

「あの、僕って今何歳なんですか？」

人が怖かった。頑張って聞いてみた。

「ああ、君はね・・・14歳だよ。」

と、言う事は、僕は2年間の記憶がないのか・・・？

- 2 -

気づいたら走ってた。
思いつきり走ってた。なぜか、道はわかった。

「痛っ！！」

頭が急に痛くなった。その場に僕はしゃがみこんだ。
なぜか、トラックに当たる。そんな場面が出てきた。

こ、怖い。助けて。だれか助けて。

体が震えだしてとまらない。涙が出てきた。

「だ、誰か・・・」

つぶやいても人は来ない。

怖い・・・。

孤独という名の壁にぶつかった。

時間がたって、僕はマシになった。
けど、まだちょっとしんどい。

「これからも、一人で頑張らないとなあ。」

一人で呟いて、笑った。

- 3 -

病院に帰った。いろんな人が迎えに来てくれた。
すぐに、精密検査をした。

看護婦さんに

「これを読んでみてください」
と言われた。

・ ・ ・ なんだこれ？変な文字が書いてある。

こんな文字読めるか！！思わず、僕は怒ってしまった。

「なんですか？これ？」

半分怒って聞いてみた。

「あなたの名前の漢字です。」

・・・かんじってなんだ？！

しゃべってた言葉はなんとなくわかってたけど、かんじってなんだ？！

わからない・・・。

第五話

- 1 -

僕は鬱になった。

急に、昔の記憶が、出てくるのは“フラッシュバック”と言っ
た。

頭が痛くなるのも、記憶喪失の影響らしい。

よく、わからない。

「痛っ!!」

まただ、フラッシュバックだろうか・・・。

前と同じだ・・・。トラックにはねられる。

「ふう・・・。」

治まった。そういえば、泣いたあの子あの日から来てないな・・・。

ガラガラガラ・・・

ドアが急に開いた。だ、誰だ?!
思わず、身構えた。

あの子だった。

121

「？」

あの子は首をかしげたまま、花瓶を持って、水をくみにいった

なんで、身構えたんだろ？

人が怖いのか?! 僕らしくないな。

「ははは」

笑ってみる。けど、何も変わらない。

変わるの、世界だ。

あの子が帰ってきた。

「水、くんだよ。」

顔いっぱい笑顔で言ってくる。なんで、この子はこんなに優しくしてくれるんだろ？

「ありがとうございます」

「一応敬語で……。」

「もう、ヒロシらしくないなあ。あはは」

「あなたの名前はなんて言う名前なんですか？」

「ん？あたしはね、あいこって言う名前。一応ヒロシの彼女だったんだよ。」

「あ、敬語じゃなくてもいいよ。」

「そう言われてもなあ……。やっぱり、僕は人が怖いんだな。改めて実感した。」

「あ、えーと、あいこさん、これからもお願いします。」

「まだ、敬語じゃん！！あはは。よろしくね」

笑うと、えくぼができてる、彼女の事を見ると、なんだかこうゆうのもアリだなって思った。

第六話

なんかあいこさんと話してて心が温かくなった。

「ほっ」って言うのかな？いや、「ぽか」の方が合ってる。
でも、あいこさんといると安心する……

うーん。。。なんだろう。。。この気持ちは……。
恋？んなわけないさ。

精密検査がまたあった。

『問題なし』だそうだ。このしょうもない病院から退院だ！！
嬉しい！！

退院は明日。あいこさんも来るし……いろんな人がくるだろう……

そういえば……僕の記憶ってどんなのだったんだろ……？

「なあ……」

何もない空に話しかけては泣いた日は何日もあった。
でも、今ならどこまでも飛んで行けそうな気がする。

行ってみるか？ドコマデイケルカ。

よし、よーいどんだ！！

心の中で思っと思いつき走り走ってみた。誰よりも早く。そして、人の中を駆け抜けた。

久しぶりにしては・・・だいぶ走れたほうだ。

明日の退院の日はどうなるかな？

ー退院当日ー

退院当日

僕は花束をいっぱいもらい病院をでた。

「これからお元気です。そのうちに記憶は戻ります。なので、それまでは自由に指してあげてください。それと・・・ここは・・・」

お母さんと話してるや。ながったるいな・・・よし、あいこさんにも会いに行こうか。

「あ、あいこさん」

「あ、ヒロシじゃない。どうしたの？」

「退院したんです。それで、この花束いららないんで貰って下さい。」

「あ！！いいの？かわいいな。ねえ。退院祝いに、アイス食べに行かない？」

「あ、いいですよ。アイスかぁ・・・久しぶりだなあ・・・」

と、言う事で行く事になった。

「すいませーん。アイスください。ヒロシ何にするっほらー!..い
っぱい種類があるよ!」

「何しようかな・・・?」

「んじゃ、あたし、ラズベリー!」

「んじゃ、僕もそれする。」

ラズベリーアイスは、ねじれてるような、、甘すっぱいような、、
変わった味だった。

「ねえ。。。もし、あたしがヒロシの事が好きだって言ったらどう
する?」

「ええ?!」

第七話

どうすれば、、、いいんだろう、、、僕は、、、
あいこさんの事、、、好きなのかな？
どうしたらいいんだろう、、、でも、、、

「あ、そんな深く考えないで。変な事聞いてごめんね。」

と、言っ僕に苦笑いをする。。。。なんだかなあ、、、

「んじゃ、行きますかー!!」

「え?どこに行くの?」

「ちょっとついてきて。」

あれ、、、?ピンク色のスカート?なんか見たことがある。。。

着いたところは海だった。ザーザーザーと波の音が聞こえる。。。
なんでこんな所へ?

「実は、ここで、ヒロシが告白して、あたしがふって、その次にあ
たしがここで告白したという伝説の場所なの。うふふ。」
と笑いながら言ってくれた。

「へえ・・・」

そこから、その時の様子から告白した言葉まで教えてもらった。
聞いてて恥ずかしかった。

「あ、もうそろそろ帰るよ。今日はありがとう。」

僕はあいこさんにさよならを告げ帰った。

- 2 -

帰ると電話が鳴っていた。なんだろう？

めんどくさいからほおっておいた。でも、なかなか鳴り止まない。

「もう、うるさいな・・・」

怒りながらでた。

ガチャ

「もしもし？」

「あー！ヒロシ君？！あいこのお母さんです！実はね！・・・あいこ
いるじゃない！？あの子が交通事故で、今、病院にいて。。」

重症で！今、手術してもらってるの。それで、今病院なんだけどね。えっとね。えっと。。。」

おばさんは、パニックになったた。同じ言葉を何度も繰り返してた。

「おばさん、落ち着いてください！！今から向かいます！！病院の名は？」

「落ち着いてるわよ！！ 病院よ。」

「わかりました」

今から会いに行くよ。。。無事で待ってて。

心の中で叫んで、自転車にまたがった。

急がないと。。。！！

あいごさん！！

第八話

病院に着いた。看護婦さんがバタバタと走っていた。

「今からオペするんですが。草野先生は？」

「全麻の準備をしてください！！」

「カルテは？」

「心マをしてください！！」

いろんな病院用語が飛び交っている。

全然知らない言葉ばかりだ。あいごさんはもうオペ室か？！

オペ室を覗いた。でも、見えない。。。

あ、おばさんだ！！！！

「おばさん！！来ました！！あいごさんは？無事ですか？」

「あゝヒロシくん。あいごはわからないの・・・後、3時間もすれば、オペも終わるわ。」

「・・・」

「大丈夫よつ。あのこは体の丈夫さだけが取り柄なんだから」

そう、慰められた。

鳴り止まないボクの鼓動。

あいこ・・・

- 2 -

痛！！まただ。しばらく来ないと思ってたら。

あいこさんもこうやって苦しんでるんだろうか・・・

僕が死んでもあいこは生きてほしい！！

なぜかだんだん今まで『あいこさん』って言ってたのがあいこにな
っていく・・・

オペ室のランプが消えた！！

あいこさんは？！

まっさきに先生の所へ行った。

「先生、あいこさんはどうですか！？」

「いやぁ。。。実はね・・・」

口ごもってしまった。悲しい顔をして。。。

「あ、、、あいこさんが?!先生!!!!いやだー!!!!!!もうやだー!!!!!!あいこー!!!!」

「まだ、全部終わってないじゃないですか、実は、成功したんだ」

せ、先生よ・・・なんで・・・?そんな言い方?

第九話

その次の日にあいこに会いに行つた。
とても、元気そうだった。

でも、後遺症はあるらしくて・・・

僕もあいこに守ってもらつた。でも、まだ記憶は戻ってない。
だから、僕もあいこと同じように、あいこを守る！！！！

今日お医者さんに言われた

「君の記憶はもしかしたら、もう戻らないかもね。」

でも、記憶戻らなくても、あいこがいる。
あいこと二人で生きていく。

好き？なのか？これは。でも、好きだ。

恋？かなあ……。
前食べた、ラズベリーアイスのような感じ。甘酸っぱくて。。。ね
じれてて。。。

「あいこ……」

「あれ？なんで呼び捨て。でも、いいかもね。」

笑って。泣いて。怒って。殴って。傷ついて。雨に濡れて。きゃー
きゃー言って騒いだり。。。

それは当たり前前の事なんだろうな。
ぼくにはこれから、漢字を覚えたり、記憶を戻す練習をしなきゃい
けない。

でも、僕はこのまま記憶が戻らなくていいと思ってる。
今生きているのが嬉しいから。

そして。。。あいこがいる。

あいこに励ましてもらって、僕は生きてる。

人を大好きって思えるようになった。
でも、まだ、ちょっと怖いところもある……

「なあ、あいこ。。。ずっと一緒にいてくれるか？」

「えっ、そうしたの？急に。うふふ。もちろんだよ。」

「それとさ、、、あいこ。。。僕。。。あいこの事が。。。」

第九話（後書き）

あーやっと終わったー

疲れました^^;

これは、記憶喪失の話をかきました。

記憶をなくすって言うのは、そんなことにならないとは言いきれないことです。

本当かどうかわからないけど^^;

でも、人とかはほんと大事なんだなって感じて欲しいです。

あーなんかおかしくなりましたけど、もしよろしければ、感想くだ

さい^^ - ^^

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2382c/>

ラズベリー

2011年1月20日14時32分発行